

運動は大變熱心で、晩年のゴルフに熱心であつた事は良く知られてゐるが九鐵社長時代はサンダーの鐵アレイで盛に運動してゐた。九鐵本社は門司にあつたので、葛葉海岸に於て毎年十一月には園遊會を開催し、知事や知名の士を招待した、而してポートレースをやつて仙石氏も漕ぐと云ふ元氣振りであつた。

ウイスキーとシガー

ウイスキーとシガーは何處へ行くにも離さない程に好であつた、九州へ來ては良くカラスミと稱する乾魚の子を好んだもので、料理屋では必ず一番に之を注文して女中達を笑はせたものである。

座談と演説

仙石氏の座談は中々ウマイものであつたが公會の席での演説などは殆んどやらなかつた、大陸内閣の時に鐵道院總裁となり、鐵道の高等官全部を帝國ホテルに招待して晚餐會を開いた席上で、私達は初めて仙石氏の演説を聞いたが、中々立派な演説で參會したもの悉く敬服してゐた。其後に土木學會長となつて、例の會長講演をされたが、之も未だ曾でない名講演であつた。それは決して雄辯と云ふべきではない、寧ろ嘲辯の方であるが、論旨は中々良く徹底してゐた。(文責在記者)

課長會議の逐條審議

仙石博士猪苗代水電時代

藏 重 哲 三

猪苗代水力電氣の建設工事は、當時に於て日本最初の大工事であつたから、仙石社長は非常に細心緻密な計畫を樹てられた。

即ち第一發電所の出力 45,000 キロワットも最大であり、此電力を 140 町距つてゐる東京まで送電する距離の點でも最大であり、世長距離送電の爲に 115,000 ボルトと云ふ電壓を採用した事も、當時としては實に破天荒とも稱すべきで、總てが最新最大の工事であつた。

私は明治四十四年の會社創立の際に會社の招聘に應じて内務省を退いて猪苗代水力電氣會社に入社し、大正三年まで仙石社長の下に居て計畫から設計施工にも關係してゐた。

當時仙石社長は此の大工事を進めるに當つて、總て何事に對しても、非常に叮嚀なやり方をされた。先づ計畫に當つて第一に調査されたのは水量の點であつた。果して傳へらるゝ處の水量が利用出来るか何うか、之に就ては明治初年蘭人技師ドールン氏の調査した書

類が内務省にあつたので、之を参考として明治以來の水量を調べる事が出來た。

送電設備に就ても、帝大の小川義太郎博士其他の専門家を頼はして調査研究をなし、日本の地勢でも差支なしとの證明を得た。

その他種々の調査が出來て愈々實施計畫が成り、工事に着手してから後も、亦非常な注意を以て總ての方面を進めて行かれた。

工事中は東京本社に於て、毎週一回課長會議を開かれた。此會議に於て各工事の計畫、準備、施工其他總ての事を協議打合した。其方法は豫算課目に就て、一課目づゝ順々に協議して、互の連絡を取り、計畫の不完全な點を正し、準備不足してゐる處を補ふと言ふやり方で、例を言ふと

「發電所の計畫は何うなつてゐるか」

「まだ設計が決まりません」

「何故決らないか」

(以下13頁へつづく)